江藤 淳

海は甦える

第四部

海は甦える

第四部

江藤淳

文藝春秋

海は甦える　第四部　山本権兵衛と政治
昭和五十八年十一月一日第一刷

定　価　一一〇〇円
著　者　江藤　淳
発行者　半藤一利
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
印刷所　精興社
製本所　大口製本
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Jun Etō 1983　Printed in Japan

海は甦える

第四部——山本権兵衛と政治

著者自装

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

33

その日の午前五時、東京市民は、四谷、九段、芝、両国、湯島の五カ所で発射された殷々たる号砲の響きに夢を破られた。

大正二年（一九一三）十月三十一日、新帝が践祚されてから最初の天長節を寿いで催されることになった、東京大正博覧会の上棟式挙行を告げる合図の号砲である。

仲秋の朝の大気は肌寒かったが、この日の空は日本晴れに晴れ上った。

諒闇の哀しみも明けて、この佳節を待ちに待っていた市民たちは、ある者は二重橋前の参賀へ、ある者は青山練兵場でとり行われる観兵式の見物に、またある者は上野公園内の大正博覧会へと、早朝から連れ立って繰り出して行った。

家々の軒には日の丸の旗がひるがえり、街という街も晴れの日のために、思い思いの粧いを凝らしている。

わけても銀座街頭は、一面に幔幕と国旗をはりめぐらし、ことに博品館、亀屋、大日本ビール会

社、天賞堂などの装飾は趣向を凝らし、人々の眼を奪わんばかりである。

京橋の欄干には紅白の布が飾られ、橋の上に蜘蛛手に渡された電燈が、朝日を受けてキラキラと輝きながら、川風にはためく無数の日章旗と相呼応している。

ここから伝馬町、中橋、日本橋を経て上野にいたる大通りは、旗と提灯に彩られてさながら花園のなかを行くかのごとくである。白木屋、日本橋魚河岸、松屋呉服店などの飾りつけが妍を競う一方、万世橋には「奉祝天長」「稜威八紘」「宝祚無疆」「万民斉仰」の額が掲げられて、祝意をいやが上にも盛り上げている。

浅草・上野行きの電車は、朝早くから乗客を満載して、六区と広小路に次々と人の波を吐き出していた。

午前六時、朝日が馬場先門に設けられた緑の大アーチに輝き、「聖寿無疆」の四文字が馥郁と菊花に薫ずるころまでには、馬場先から日比谷、桜田門にいたる道筋は、まったく奉祝の人々によって埋めつくされた。

男は紋付羽織袴、フロック、普段着というようにまちまちな服装だが、女たちはめいめいに盛装をこらし、晴れの衣裳に脂粉の香りもあでやかに、秋晴れの菊日和を楽しもうとする風情である。

午前八時、警蹕の声が一際高く響きわたるのを合図に、打ち上げられた花火がサッと五色の雲を空に流した。

新帝陛下の出御であった。三十五歳の天皇が、大元帥の御盛装に勲八等白色桐葉章瑞宝章と大勲位菊花大綬章を併佩(へいはい)され、御気色ことに麗しく、しずしずと鹵簿(ろぼ)を正門の外に進められると、沿道の市民のあいだから期せずして、

「万歳！　天皇陛下万歳！」

という歓呼の声が沸き起った。

御行列は軽塵を上げて青山練兵場に向い、沿道の歓呼は引きも切らなかった。

この日の諸兵指揮官は、閑院大将宮殿下である。

鳳輦(ほうれん)が練兵場入口に到着されると、閑院宮は参謀長を随えられ、奉迎整列の各隊に、

「気を付け！」

の号令を下された。

その瞬間、軍楽隊による「君ヶ代」の奏楽が開始され、鹵簿を出られた新帝は侍従武官長の先導で玉座に着かれて、皇族方、各国大使、大山大勲位、斎藤海相、楠瀬陸相をはじめとする陸海の将星と外国武官を引見された。

大山巌と並立する陸軍の最長老、山県有朋は、所労と称してこの席には姿を見せなかった。内閣総理大臣山本権兵衛も、統帥権を尊重する先例にしたがって、ここには参列していなかった。

御愛馬「ダップ」に召された天皇は、近衛歩兵第一連隊からはじめて順次諸隊を閲兵されたが、

午前十時十五分、御閲兵を終えさせられて、多数の将官と外国武官を従えられ、馬蹄の響きも軽やかに権田原口近くを通過されるや、この辺りにひしめいていた群衆はいっせいに帽子を振りながら「万歳！」を絶叫した。

そのとき陛下は、二、三度その方に視線を向けられ、肯かれたかのようであった。

群衆のなかには、この好天気に四寸歯の高足駄をはくという機転を利かせて、観兵式がよく見えるように前もって準備していたらしい、淡鼠色の小紋の羽織に棒縞お召姿の中年女性もいた。

海老茶の地に白く「ＪＶＰ」と染め抜いた小旗を、手に手にたずさえている洋服姿の一団は、米国オレゴン州ポートランド市からやって来た母国観光団の人々であった。そのなかには、

「こんな幸せなことはないぞ。見ろ。こんな幸せなことはないぞ」

とつぶやきながら、男泣きに泣いている者もあった。

カルフォルニア州ほどではなかったが、隣接するオレゴン州にも、加州の排日土地立法の余波は及びはじめていたのである。

閲兵をすべて終えられた天皇は、御馬を玉座前約二十歩の地点に進められた。そのとき諸兵指揮官の、「前へ、進め！」という号令が、凛然として一瞬静寂に戻った場内に響きわたった。いよいよ分列式の開始であった。

軍楽隊の奏する行進曲につれて、勇ましく歩武を進める各歩兵連隊間の距離は三十歩、教導中隊、

各騎兵連隊間の距離は四十歩と定められている。野砲兵各連隊間は四十歩、工兵各大隊、電信隊間は三十歩、輜重兵各大隊間の距離は四十歩である。歩兵と野砲兵の各連隊長は侍立して、一々御前を行進する大隊長の名を奏上した。

分列行進が終るに及んで、各隊は三度隊形を変え、奉送の準備を整えた。午前十一時、新帝陛下は、諸隊指揮官閑院大将宮以下の最敬礼のうちに還幸されたが、実はこの盛儀すら天長節奉祝の諸行事のうちの、ほんの序幕というにすぎなかった。

権兵衛のこの日の日程は、正午少し前御祝詞奏上に参内したときからはじまった。

正午からは、千二百十三名に及ぶ内外の貴賓を招いての宮中の祝宴が催される。

それに先立って、天皇は、正十二時宴会場に当てられた豊明殿に臨御され、内外の顕官が起立、最敬礼によって祝意を表するのを御会釈で受けられると、玉音朗らかに次のような勅語を下賜された。

「朕生誕の祝日に当り、各国代表並に諸大臣等と宴を開き、歓を共にするは、朕の満足する所なり。茲に友邦の君主および大統領の健康を祝し、併せて交際の益々親密ならむことを望む」

これに対して、権兵衛は、恐懼して奉答した。

「茲に天長節祝日に方り、群臣を御宴に召し、且つ優渥なる勅語を賜う。臣等感激の至りに堪えず。臣権兵衛、群臣に代り、敬で天恩の厚きを謝し、恭々しく聖寿の無疆を祝し奉る」

帝国の宰相として、権兵衛には、新帝の御代をそれに先立つ時代にもまして輝しいものにしなければならぬという、重い責務が課せられていた。あとじさりして自席に戻った彼の虎の眼は、内心の決意をうかがわせて力強い光を放っていた。

外国使臣を代表して奉答したのは、在京外交団長のフランス大使、ジェラールである。大使のフランス語による謹厳な奉答を、伊藤式部次官が通訳して奏上すると、陛下の御気色はますます麗しく拝せられた。

実際、御陪食を仰付けられた内外の賓客の数の多さでは、この日の午餐会は、先帝陛下の御治世をはるかに凌ぐ盛会であった。

明治時代を通じて、最も多くの人々がお招きを受けたのは、明治四十四年(一九一一)の天長節の祝宴だったが、このときとても陪食者の数は九百二十四人にとどまり、千人を超えるということはなかったのである。

このために、豊明殿だけではとても陪食者を収容しきれず、隣の千種間(ちくさのま)をすべて打ち開いてもなお足りず、東溜りと北溜りに列席を設けて、御名代の閑院宮が主人役を勤められるという有様になった。

当日の御献立は二の膳つきの和食と日本酒だったが、芝楽長以下二十九名の楽師が庭前で演奏した音楽は、洋楽の吹奏楽であった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

午後二時には、権兵衛は閑院宮殿下に供奉して、宮中の宴席から上野公園内の大正博覧会上棟式場に来ていた。

この日の上野の山の雑沓は、おそらく府内随一であったにちがいない。午前七時からすでに大囃子がにぎやかにはじまって、人々を惹きつけていたが、午前十時には摺鉢山で海老一の太神楽が開始され、奉祝の大相撲も開かれて、上野広小路から山上にかけては、電車の線路も見えなくなるほどの人出で混雑のきわみとなった。

そのなかを、正十二時、黒門町の西側に勢揃いした数百人の消防夫たちが、幾十とない纏を振りかざして、木遣音頭も勇ましく上棟式場へ練り込み出した。江戸火消の粋の再現である。戊辰の怨みは、すでに往事茫々の彼方に霞んでいた。

上棟式場に当てられたのは、竹の台博物館前の広場である。

ここには紅白段々の幕が張りめぐらされ、国旗と彩旗が眼も綾に飾られて、麗らかな秋の日に照り映え、ことさらに美しく見えた。

閑院総裁宮殿下を戴いての上棟式に引続いて、午後四時からは立食会が催され、四千に余る来賓たちは俳優の寿三番叟や吉原芸妓五十余名の手古舞、江戸火消連中の木遣音頭に歓を尽した。

空にはおりしも末広の扇形の雲がひろがりはじめ、夕映えがこの雲を紅に染めて、不忍池に影を投じていた。

丸の内の三菱ヶ原には、その同じ扇形の雲を見上げながら、夜の到来を待ちかまえている四万人余りの人々が詰めかけていた。提灯行列のために集った、東京実業組合連合会の組合員たちである。

夕映えの紅が、つるべ落しに周囲の宵闇に呑み込まれて行くかと見えた午後五時すぎ、一発の花火が高らかに轟いて中天高く打ち上げられた。それと同時に、馬場先門の大アーチが、電燈装飾（イルミネーション）に照らし出されて薄暮のなかにくっきりと浮び出た。大提灯行列の開始を告げる合図であった。

徐（おもむ）ろに行動を起した実業組合員たちは、袂を連ね肩を相摩して三菱ヶ原から馬場先門に向った。

遠くから見ると、この提灯行列は、一条の火の道が天を焦がしてお濠端にうねり出したかのように見えた。

その先頭が今しも馬場先門の大アーチを潜ろうとするころ、かねて今宵のこの大提灯行列のことを聞こし召していた天皇皇后両陛下は、三角（みすみ）門の傍らに設けられていた御座所に出御された。三角門は、御車寄（みくるまよせ）から鉄橋を渡ったあたりにある門である。

新帝は、この場所からお濠の彼方を提灯を打ち振って通りすぎる民衆の祝意を受けられようというのであった。

そうするうちに、二張の高張提灯を先頭にした行列は、刻々と二重橋前に近づき、小砂利を踏みしめる音があたりに響いた。

東京赤十字支部の救護班に続いて進んで来るのは、星野会頭以下の連合会の役員たちである。彼らはみな、フロックコートか羽織袴に威儀を正し、奉祝の二字を記した馬乗提灯を携えていた。

そのあとからは、東京絵具染料工業薬品荒物同業組合を第一団に、東京医科器械同業組合、東京洋傘問屋組合と行列がつづき、さらに東京帽子製造同業組合、東京足袋同業組合、東京印刷業同業組合、東京履物商同業組合などの行列が、引きも切らずに延々とつづいた。

二重橋の前まで来ると、各同業組合の人々は整列して紅白の提灯を高く、あるいは低く打ち振り、

「万歳ッ！　万歳！　天皇陛下万歳！」

と絶叫した。

そのたびごとに、お濠の彼方の提灯が左右に揺れた。両陛下が市民たちの熱誠を、御嘉納あらせられているのであった。それを見た人々は、さらに熱狂して、

「万歳ッ！　万歳ッ！」

と叫びつづけた。

ちょうどそのころ、巡洋戦艦金剛は、マニラ湾をあとにして北上をつづけ、一路故国へと波を蹴立てていた。艦長中野直枝大佐以下六百余名の乗組員の士気はきわめて旺盛、毎時十三ノットの速力で台湾東岸を北進し、十一月三日正午ごろには大隅海峡に達する見込みと報じられた。

金剛は、英国バローに在るヴィッカース造船所で建造された、帝国海軍の最新鋭艦である。いや、すでに述べたように少くともこの当時、それは世界最大最強の巡洋戦艦であり、いわゆる超ドレッ

ドノート級艦としても劃期的な堅艦と考えられていた。

明治四十四年（一九一一）一月十七日に着工された排水量二万七千五百トンのこの巨艦は、翌四十五年（一九一二）五月十八日に進水式をおこない、大正二年（一九一三）四月末には艤装をほぼ完了した。

各種の試運転と公試発射を終えて、ベルファーストで中野艦長がヴィッカース社から金剛を受領したのは八月十六日、いよいよ英国をあとにしてプリマス港を発進し、回航の途に着いたのは八月二十六日であった。

その後、金剛は、航路を南にとって九月四日にはポルトガル領のセント・ヴィンセント島に達し、五日間碇泊したのちさらに南下を続けて、九月二十二日にはアフリカ最南端のサイモンス・ベイに到着した。

当初の予定に組み込まれていたポート・ナタル寄港を取止めてサイモンス・ベイを抜錨したのが十月二日、インド洋を横断してシンガポールに投錨したのは十月二十日である。二十七日には同地を出航、横須賀に帰着するのは十一月五日午前十時の予定であった。

十一月十日には、新帝陛下をお迎えして、御践祚後最初の観艦式が東京湾頭木更津沖で挙行される。金剛は、この晴れの日に間に合うように潮路を急ぎつつあったのである。

この超ド級艦の排水量二万七千五百トンは、もとより帝国海軍のあらゆる軍艦中右に出るものが

なかったが、その威力は単に全長七百四フィート、幅員九十二フィート、吃水二十七フィートという、艦の桁はずれの大きさだけにとどまらなかった。

金剛の主砲十四インチ砲八門に匹敵するものは、全世界を見わたしても、建造中の米国の超ド級戦艦テクサス以外に一隻も見当らない。しかも、十四インチ砲十門を有するテクサスの最高速力が二十・五ノットにとどまるのに対して、金剛は実に二十八ノットの驚くべき高速を誇っていた。

この高速を維持させるのは、七万馬力の推進機である。二個の機関は厳重な縦の間槍に分たれ、各々が補助機関を有していた。

機関のなかには高圧低圧二種類のタービンが包まれ、前者は外軸、後者は内軸を回転して、合金製二葉式四個のスクルーを互いに反対方向に作動させるのである。

燃料には最新式の炭油混焼装置が採用されており、三千五百トンの石炭と一千トンの重油が艦内に貯蔵されている。艦の神経系統ともいうべき電信線は、手厚く防禦されて艦内にくまなくはりめぐらされ、特に無線電信には特別の注意が払われていた。

金剛のもたらした最も劃期的な造兵技術上の革新は、従来の型を破って、十四インチ砲八門の主砲を、艦の中央線に位置する四個の砲塔に二門ずつ配備し、左右両舷のいずれの方向にも砲火を集中できるようにしたことである。

これについては、着工当時大使館附武官としてロンドンに在勤していた加藤寛治大佐の進言が、大いに貢献していた。

加藤はこのとき、海軍本省における省議の結果、五十口径の十二インチ砲採用と決定したということを聞いて危機感にかられた。すでに英国海軍においては、主力艦に十三インチ半以上の砲を採用するのが趨勢となっていたからである。

ここにおいて加藤は、斎藤海相に親書を送り、金剛の主砲に十四インチ砲を採用すべき旨を強く進言した。そして訓令をとりつけると、英国海軍軍令部長ロード・フィッシャーに働きかけ、ついに英国海軍で試験済みの五十口径十二インチ砲対四十五口径十三インチ半砲の実射成績表を入手することに成功したのである。

その結果は、あまりにも歴然としていた。実射成績によると、五十口径十二インチ砲は命数がきわめて短く、弾着が散らばる傾向があるのに対して、四十五口径十三インチ半砲は命数が永く、散布界が小さくて、命中率がはるかに大きいことが明白であった。

ぐずぐずしていると、取返しのつかぬことになると憂慮した加藤は、思い切って武藤造兵監督官を、往復七週間の予定で東京に急派することにした。

そのとき加藤の命によって、一時帰国した武藤が最初に訪問した本省当局者は、艦政本部第一部長の村上格一少将である。

村上は、武藤の話を聞くと沈思黙考していたが、やがて、

「よろしい、引受けた」

と胸を叩き、早速財部(たからべ)次官と協議して、省内の意見を一転させるべく猛烈な運動を開始した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com